

巻頭によせて

院長 丹野三男

ここ数年、色々の機会に医師の生涯教育の必要が強調され、日本医師会でも今年の6月から毎月の学習時間の自己申制を試みている。

医学部における卒前教育は勿論、卒後研修も定着しているが、個人で、或は病院で診療に従事しながら、あらゆる機会を利用して自己研修に励むのが生涯教育であり、not four years but forty years と云われるように、医学は学生時代の4年間だけでなく、その後の40年の勉強が求められるものである。

最近の医学の進歩、発展は驚嘆に値するものがある。即ち医学雑誌を初めてとする情報量の増加、画像診断等の技術開発による診断学の革命、分析化学の進歩による新しい病気の発見、抗がん剤等の新薬の開発、更に今迄の診断、治療の時代から、健康増進、予防、Rehabilitation という包括医療の時代に入っておるのである。

アメリカの卒後教育、生涯教育が徹底しておるのは専門医制度と opensystem 病院に負う所が極めて大きいと云われている。

医科大学卒業後、Internを終え、Residentとしての過酷なまでの勤務ぶりは有名であるが、こうして集中的に多数の疾患を経験し、将来の高収入と高い社会的地位を目指して努力するという事である。又開業すれば難かしい患者を open 病院に送りこみ、自分が率先して Intern, Resident を指導しながら先端医療に取り組むわけで、勉強せざるを得ない状況に身をおくことにより、自然と意欲がわくのであろう。日本式に手にあまる患者は病院に送れば一安心という考え方とは根本的に違うものがあるように思われる。

生涯教育は勉強し、知識を貯え、或は体験学習したものを十分に生かせる場があってこそ、初めてその成果があがるものではなかろうか。

生涯教育が叫ばれる今日、私共勤務医も更に一層の向上を目指すことを念願し、巻頭の言葉とする次第である。